秋夜夢物語

全

1963
46

自序

汲ども尽ず呑どもかはらぬ猩々
舞を舞を猩らしく○せせども あらず
是云どもかはらぬ転じ舞をするハ
常盤銀○ゟ金山の舞所居てし
なまじひのハ金なりけれ足が○出来る

1963
46

ものハ金なり。有る夜ふと不思議の夢
を見る白髪なる老人杖を携る
見れよくよく決断すべきを與ふ。
日頃正直なるにより今此福を
与へぞしと。手に持たる杖を授て
我目玉を好めるの心に見えて覚め

覚より。是を案じて欲目の然る
ところの故知れり。壽を目出度
と云。便の無き目が出るを云一首
出飴と東顔なるハ見れど。目
と金出て取替へる出ぬ人
我たくの事ものと。我も事とも理金で

夢物語成直序とす

喜泉亭鯉誌

嚢中無済して。秋の寝覚の燈

物寂しく机上にかゝりて机に

所。足駄の歯入小刀研所なるまで

おのれ妄言を書ちらし。御慰川

わが民の竈の賑々中にも。

桜摩識張々篷治の夢まてせん

しての節也と見ひ。およがなる銚子
と称し。笛の婦女がかんまんとて刺
も。偏り武将の繁昌眼のかなきので
業様中り。代々の質ある月の足へ
ぬ主人。慈失致良ぬ私しての通也
りそも。両眼騒しくもして青眼

しらずや。徳盲の流れを世にも
恐しく神明に祈りて。盲ならん
ことへども黙業すや目の法ずんざるも
御精ぞ独言する折のこと。或人来
問曰。無眼有徳ありや　答曰有
汝登里山字を知らずや按摩の

早業なしく撞木杖を持せ。一身
千金を擲て太平を吐。不顧して
庶人貴人高擡よりては大臣の
称せしも佳婦有多く常夫を
欺ハ是外無眼の徳を云ば悪鬼
同おありても不婦奢媚有ても

益盛。貴人の言辞に及て悪口八百
放けては大丈夫ならずや。是勇気
何るが故之只白盃有夫の叢を
恥のと　一子寛尓笑而足下
盲の徳を誉けり。何矣無眼の
徳をふん夫金の位あり　答曰

沙真金なりや　無し　夫其真
金は地を以て何よりも腱。目明私
急勇救すは何人で登里当
一族せっかん当世目明の分限
せきかた以て刻に天窓有頭の
銀なる息子も金持の大庄

武士も座頭有何ずやの下の徳
此を以て知り渡らしらけて言べ大に
立腹して其止職人己が目の加勢
が我まさ育は貴に破家ないえん。
四民各其業に怠り農は耕を知らず
絹布をりて田畑を荒し。工も

手斧の刃先を知らず打つ呑の二歳
ともかくし。商家は十露盤を投て狗杷
の曲は白在に心得。吉原深川の
茶屋にて珍頭を出ざる也。尻
かしらも火のつくやうな閑所通ひ。雛
の正月死んでする時に出る出し。

人の正月金備へしてする時喜びます
世とも娘の寿命を祝へ三両一歩の潤より
落魄て商に従ひ是を李報まず
所謂金が仇の世の中殺せ金がなければ
何の心の眼が何しが金より下さ六
小野氏の金を名利とむさぼる

邪欲の盲目なれば恨人面銅銭に
おのが心より奇妙ふしぎ少し
悪しき心を心よりして叶はじと見世
むき出しにして名代今宗兵衛登雷鬻
の算用がしぎ。夫まで身を振る首を
らする所悪で。三両一分が売事正ある

人を助くる金を溜り止ざるや袋ぬ
恨八分なしがたし。金持老人の世わ
を云りて人の命継ぐるものなり。金銭
借て取て其儀無とう云へば由々有。
其時のとんまり額の盲の非道のふかふ
思へり是目明の無道人世情をに云

恩義偽く反。是又も理なりや。世人と
くと罵らるれバ　子夏尊書高
ハなや。金の事ハ兎も角も先ハ云
悪鬼目前にまでも仏と云ハ
盲蛇物に怖ず。後悔すれども
今金の威光なり。神哉奴隷

盲に惚る婦を以ず。皮肉渦川と
せん八鍛冶物ぞ成べし。飛里雷
後して後一昨も世りて両夫に見
バ忽自帰之人よくせんの情を受
為之の大夫八知らまでる。酒の
諂ヶ満をもせ寝のよで化鯛子

くらぶるすハ桜田皆鍵の作にて
諸人知る所也上路の茶めも買あ出
中洲の功諸ゟ驗を以で後
極秘の句とす是をいふのみす
ぞの至極ハ些細ひげ小波瀾流て論ずる
みぞ外面に某を志るよしるを知

気の毒ながら足ハらん内へ這入今手段にて
各の自論術の癖あり互に守之盲目
猶ても三つも更まじきまゝ議のも
諸界臨機の要あり各自得の流ある
しきに及て更眼が金するを
見りるとも一理皆えても同じけんが

ところても諭の如くなるとしても
御ざて地獄の浮沈もまぬかれず。
寒ひなく寝し。〇亦迷の耳ひ
ところて時世の巻よ。〇盛者
必滅ハ世のならひまことに哀なく令
が持くハ後世願ひて仏ふかりせし。

見てふさの通り吾光るが如あかハ言利
でもかく貪でもかく元生偶作
しての何がし〇掠ある徳井をば
それそし作織る人もかく〇内作て儲ゐの
〇是聞ら童最一位上てなる〇拙僧
も藻鳴跡嗜み彼みや事が紛小

もろくつの手名首ハ仏楽のて
断絶り工面さつ毒るなき月瓶
生きた地獄も重かしきる分別
ならハ。死生流転ハ苦界の役両手
の事纏足るふ志のびず足はし
すゝ。人間僅五十年空なり

出て宿ふかゝる。朋友も離れ
めも覚かしら起る苦痛と大病も
の中なれ共常ハし。乾闥婆ハ盲目
も千人眼明も千人。極重悪人
無他方便南無阿弥陀仏
南無阿弥金也剣の仏のせり哉

と倶に。三人ども川へ飛しが
雉子遁げ肝を潰して。せいさんの妻の
首ねぢ／＼しく首緒捕りぬ